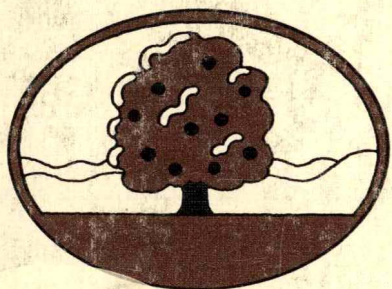


北杜夫全集——2



夜と霧の隅で
遙かな国 遠い国

北杜夫全集 — 2



新潮社版

よる きり すみ はる くに とお くに
夜と霧の隅で・遙かな国 遠い国



〈北杜夫全集 2〉

一九七七年五月二〇日 印刷
一九七七年五月二五日 発行

定価 一〇〇〇円

著者 北 きた 杜 もり 夫 お

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

東京都新宿区矢来町七一(千一六二)
電話 業務部 東京(〇三)二六六一五一一
編集部 東京(〇三)二六六一五四一一
振替 東京 四一八 〇八 番

印刷 株式会社 光邦
製本 大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えます。

目次

霧の中の乾いた髪	5
谿間にて	23
誕生	53
浮漂	67
星のない街路	109
不倫	127
埃と燈明	137
異形	159
遙かな国遠い国	175
河口にて	221
夜と霧の隅で	235
初出と収録	312

夜と霧の隅で・遙かな国 遠い国

霧の中の乾いた髪

次第に朝の光が空一面にみなぎりはじめた。しかしまだあたりはぶ厚い霧に閉ざされたままである。落葉松の林のかげには夜のなごりがあり、下草の葉はしつとりと濡れている。ポロシャツの短い袖からむきだした腕が冷たい。どこかで小鳥が啼いているが、姿は見えない。

霧はごくゆっくりと動き、別荘の生垣にからまって流れた。

渡は、霧につつまれて歩を運びながら、自分からなにかが通れていったような、その反面、なにか見知らぬものが生れてきたような気配を感じていた。これは何なのだろう？ 久方ぶりに味わう高原の朝の冷気もたらしたもののか。それとも来年は高校を受験する彼の年齢がもたらすものであろうか。

星野温泉の裏山が霧の中にぼんやりとまろい輪郭をあらわしてきた。そのとき、渡は憶いだした。さきほどから自分につきまとっている訳もないいらだちの正体を、そのぼんやりとした形態の中に見たように思った。彼は昨夜、生れてはじめて女の乳房の夢を見たのである。

目の前で霧がゆらぎ、ふしぎになまなましく、夢像と現実がまざりあった。

むこうから誰かがやってくる。渡は目をあげ、ちょうど夢のなかの知覚のように、一人の女が霧の帳の中をこちらに近づいてくるのを認めた。ひとしきり霧が少年の胸へながれいり、漠とした渴きを撫でさすった。そして、いまはすぐ前に近づいたすらりとした女の印象を、一瞬のあいだに彼は吸いこんだ。年齢は三十近くか、それとももっと上なのか渡にはわからない。格子縞の半袖のスーツの上着に、真黒のスラックスをはいている。

すれちがうとき、女はほとんど物珍しげな表情で少年を見やった。冷酷といってよいような視線である。ややこわい感じにうねった髪が、整った顔立ちを縁どっていた。首すじがいたくほそい。

渡は目を伏せ、足早に歩いた。せきたてられるように歩いた。路傍のカヤに露が光っている。前方の霧が朝の光に追いのけられるにつれ、それぞれ濃淡の異なる樹々の緑、ヒュッテ風の別荘の沈んだ色彩が浮びあがってくる。

道を折れたところで渡は立止った。ぎこちなく周囲を見まわし、自分の鼓動の音を意識した。それから、ひどくのろのろと、自分の家のほうへ足をむけた。

門口を入ろうとして、思いがけず渡は佐々木に行きあっ

た。この夏、彼の家で部屋を借りている大学生の一人である。ずんぐりして、太い眉と大きな口をした男である。自分がひどく間の抜けた顔をしていたように思え、渡は口ごもりながら慌てて言った。

「早いですね」

「やあ、早いな」

予期に反して佐々木はいつもの軽口をださなかった。そういえば、へんに気むずかしい顔をしているようだ。

「散歩ですか」

「まあそんなところだ」

「こんなに早く起きることもあるんですか」

「そんなに早いかね」

ようやく佐々木は、常々見せる人を小馬鹿にしたような笑いを浮べた。

「どうやら俺は寝呆けたらしいな」

それきり彼は背をむけて先に玄関へはいっていつてしまった。渡は少しあつけにとられた。なにしろ佐々木くらい無遠慮で話好きで慣れない男にもあまり出会ったことはないからである。

夏休みになって渡が中軽井沢のこの別荘にきたとき、佐々木はすでに部屋を借りていて、いきなりこう言ったものだ。

「君はこのうちの子かい？」

「そうです」

「そうか、そうか。君のおふくろさんは、まるで人魚みたいな方だね」

渡は返事ができなかった。なぜって彼の母親は人魚どころか肥満の極に達していて、彼は親しい友達にもこの母親を見られたくなかったからだ。

「人魚を知らないのかね」

相手は、渡の顔をのぞきこむようにして言った。

「人魚ってのは、つまりジュゴンのことだ。ありゃあ無気味なものだ」

佐々木は、山口という対照的にひよろ長い相棒と一緒に部屋を借りている。卒業論文を書きにきたというのだが、渡からみてもまるきり子供じみた話に夢中になっていた。朝からウイスキーを飲んでいたりする。彼らの机の上には、洋書が一応積んであって、そのわりにジョニーウォーカーがびん置いてある。毎日飲んでいくせに一向中身が減る様子がない。訊いてみると、こういう返事であった。

「飲んだあとに安ウイスキーを足しているんだ。ウイスキーって奴は、いいほうの香が移るものだからな。もう何回割ったか覚えてないが、この中には、少なくとも、まだ本物が十滴くらいはまじってる筈だよ」

佐々木のいうとおり、渡の母親はジュゴンそっくりに横たわっていることが多かった。女がもって生れた虚栄心を失ってしまふと、こうまでだらしなくなるものかと思われほどである。ここ二、三年来、彼女は手品のように肥ってゆき、今では身動きをするにも息切れがするらしかった。顎が二重になり、ほそい目が殊さらにほそくなり、手足はくびれて、まるまるとした赤子のそれに似てきた。せめてきちんと和服でも着てくれたら、と渡は思う。しかし彼女は薄っぺらなよれよれのワンピース姿で、座蒲団を枕に畳の上のころがり、動きもしないのに汗をたらしていた。そのワンピースは、古い羽織の黒い紗で作ったもので、要するに「一種異様」としか形容しようのない代物であった。「暑いねえ」と、こんな避暑地にきても彼女は言う。そしてウチワで巨大な臀部を数回あおぐと、もう何もできぬくらい疲れてしまふらしいのである。彼女にとっては、日ざかりの幾刻かを、なんとか肥満した体を数回寝がえりをうつことと、思いだしたように、「暑いねえ」と呟くことが大仕事のようにであった。

数年前父が死んでから、渡の家はこの別荘を維持してゆくのは贅沢にすぎるといふ状態であったが、この母のために手放すことができなかった。母と渡とその姉のあき子だけ

で使うのも勿体ないというので、この夏から間貸しをすることにしたのである。今では一家の働き手である渡と十歳も歳のちがう兄は、ひと夏に一回か二回、それもちょっと顔を見せる程度にすぎなかった。

炊事はほとんど姉のあき子がやる。彼女は料理をつくることはつくるが、あとを片づけることができないため、近所のおばさんが後始末にきている。渡にとってはこの姉も恥ずかしい存在であった。短大の英文科を途中でやめたのは、とても授業についてゆけなかったためらしい。ぎすぎすと痩せていて、とがった鼻と軽い乱視のため、一見利口そうにも見えるのだが、かなりの精神薄弱だと渡は信じている。彼女は料理を習い、茶と生花を稽古したが、なにひとつ人並みにできない。それから元宮様を会長にしたなるとかいクラブに入会したが、新しい男女の交際を教えるとき、「お下劣ね」と言っただけでやめた。彼女は結婚というものにはけがらわしいものだと思ひこんでいる。そのくせクラス会から戻ってくると、誰々さんが結婚したと忪から喜ばしげに報告するのである。汗がでない季節には、自分の肥り具合と同じくらいに、この娘がうまく縁づいてくれるようにと母親が願っていることを渡は知っていた。「お母さま」と、早目の夕食の席で、そのあき子がばかに勢いこんで言った。「なんていう人たちでしょう、あの太

学生たちは！」

立腹すると彼女の顔はいっそうとがって見える。この姉もいつかは結婚して子をうみ、そして母のように肥ってることがあるのだろうか、と渡は考えた。彼は茶をのみかけてむせかえった。

「なにがおかしいの？」

あき子は直感だけは鋭い。彼女は自分の知能が劣っていることを半ば無意識に自覚していて、そのため妙に四角ばった、ときには朗読でもするような口調を使うのである。

「何もおかしくないよ」

「いいえ、たしかにあなたは笑いました」

まるで外国語の直訳だな、と渡は思い、仕方なしに訊いた。

「佐々木さんたちがどうかしたの？」

「あのテンブラ学生の部屋の汚ないことったら！　まるで豚です。それにあの人たちときたら、まるでエントツみたいに煙草をすってます」

「そりやおまえ、煙草くらいおすいだろうよ」

大儀そうに母親が口をはさんだ。

「すうだけじゃありません。吸いさしを灰皿めがけて遠くから投げるのです。万に一つもはいりやしません。鼻が焦げだすと、あの人たち、どうすると思います？　寝そべっ

たまま、火事だ、火事だ、ってこうよ。二人とも起上ろうともしないで……」

「そりや危ないねえ」

ちっとも危なくないような調子で母が言った。

「危ないどこじやありません。そのうちあたしたちは焼け死にますわ。きつと黒焦げになりますわ。お母さま、なぜあんな人たち追いださないの？」

「追いだすたっておまえ、いったんお貸ししたのを……」

「お母さまには頼みません。あたしが追いだします」

姉の目が釣りあがってくるのを渡は眺め、いきりたったカマキリに似ているな、と思った。

「その前に部屋代をとらなくちゃいけません」

「部屋代といってもねえ」と、のろのろと母が言った。

「道楽で部屋を貸してるのじゃありませんわ」

あき子は彼女の一家がいまにも路頭に迷うという幻想に浸っていて、渡が母に小遣いをねだったりすると、すぐさま叱りつける。そのくせ自分では人一倍、ものにならぬさまざまな稽古代を浪費しているのである。

「だってあき子、書生さんのことじゃないか」

「お母さまのようになさいましたらね」

と、あき子はほとんど嚴肅な顔をして言った。

「あたしは誓っています、この家をのっとられますわ。」

あの大学生たちはそういう手合いなのよ」

「アブレとかいうのですかねえ」と、母親は自信なさそうに言った。「マンボとやらを踊るのかえ」

「踊りなんか踊れるのですか」

あき子は軽蔑しきったふうに、いらいらと肩をうごかした。

「あの人たちがどんな歌を唄っているかご存じ？ 杉野はいずこ、スギノーはいーずこ、ってこうです。あの二人は白痴なのよ」

渡はこの姉が、とにもかくにも卒業論文を書きにきた大学生にむかって、部屋代の請求をしているさまを想像しただけでぞっとした。おそらくあき子は立派に部屋代をまぎあげ、自分の家の経済的危機を救ったつもりで得々となるだろうし、大学生のほうでは東京へ帰ってから、自分らがどんな家に滞在していたかを友人たちに話して笑いの種とすることだろう。……

ここでも日盛りは暑かった。しかし夕方が出て、ものかげが青みをおびてくると、急速に夜と冷氣がおしよせてくる。

すっかり暗くなってから、渡は外へでた。ちょうどその日天皇陛下がこの地を訪れ、沓掛の町から提灯行列がくるというので、プリンスホテルの前まで見にいこうと思った

のである。

ホテルまでは十分とわからない。高原の夜気は快く、日中は乾ききって砂埃の村道も、夜の帳の下では魔術のようにおもむきを変えていた。小さな螢火がひとつ、ぼんやりと白い浴衣姿の人影とすれちがった。

しかし、事務所のある広場の付近から、急に人々で一杯になっていた。ホテルの前あたりは提灯をもった人波があふれ、ずっと坂の下までつづいているようだ。警官や青年団が声をからして整理している。渡はいっしか人波にまきこまれ、押されながら進んでいた。

すぐ前に渡と同年配の少女がいて、彼はやむを得ずごく自然に、彼女の背に胸をおしつけられた。横をむいた少女の顔を見ると、まだ育ちきらず、日焼けして小ぢんまりと可憐である。おしつけられる肩の骨はかたかった。つい先ごろまで、このくらいの少女が渡の夢想を育んでくれたものだった。しかし、このときはなぜか渡はただこう考えた。この女の子は、きつとバタが嫌いなのか、サナダ虫がいるか、どちらかだな。

人々のざわめきの中で、長い時間がすぎたように思われた。人波にもまれながら、渡は知らず知らずに自分が、その日の朝、霧の中で行きあつたずっと年上の女の姿を考えているのに気がついた。横にいる皺だらけのお婆さ

んが強く押されて苦しげに声を立てた。

渡も同じように人波に押されながら、ふいに自分が悲しくなってきた。あの女もどこかにきているだろうか。いや、けつしてこんなところに来はしまい。あのとき、霧のなかで、一瞬自分を眺めた女の目つきを彼は憶いだした。

吟味するような、冷笑するようなあの目。ふたたびその視線に囚われたように、少年はわなないた。彼はあのとき見たのだった。肩のあたりまでうねっているかたそうな髪、ふくらんだ胸、そして黒いサンダルをつっかけた裸のくるぶしまでを。なんと一瞬の間に彼はすべてを見、それらのすべてがなんと鮮明によみがえってくることだろう。

渡は吐息をついた。すると、一刻も早くこの喧噪から遁れ、誰もいない暗い小径をどこまでもさ迷ってみたいという気持が強くおしのぼってきた。

だしぬけに、前のほうで万歳の声がわきおこった。提灯が何回もさしあげられ、その一団がひきさがる、否も応もなく渡たちは一番前列におしだされた。ホテルの門の前には縄がはられ、閉ざされた門の背後には数名の警官が立っているだけである。小太りした青年団の団長らしい男が、陛下は御旅行のお疲れで皆さんの歓迎におたえできないので、ここから陛下の万歳を唱えようと思います。という意味のことをのびあがって叫んだ。彼の声は気の毒なくら

いかすれ、彼の頬は満悦のあまり今にもこぼれ落ちそうだった。まるで陛下が出てこれないのは彼の一存できめられたかと思われるほどである。それから団長はぐっと胸をそらし、それまでどこかに隠しておいたらしい堂々とした声で叫んだ。

「天皇陛下、ばんざあい！」

群衆がそれに和し、渡も人々と一緒に万歳を叫び、ついでその場から押しだされた。渡はつまずきかけ、ようやく人ごみから抜け出すことができた。

事務所まえの広場まで戻ってきたとき、ふいにうしろから声をかけられた。二人の大学生、佐々木と山口がにやにやして立っている。

「渡君、君は感心だねえ。愛国者だな。それとも女の子でも捜しにきたのかな」

「あなたたちはどうなんです？」

渡は言いかえた。彼は二人の大学生とここ十日ばかり一緒に暮しているうち、そういう口のきき方を覚えていた。「俺は草莽の臣だよ」と、佐々木は言った。「陛下を拝めなくて寂しかったよ」

「ここら辺はしけてるな」と、山口。「明日あたり自転車で旧軽へ行ってみようや」

「女の子のことなんか考えるな。俺は土下座をして拝みた

いよ」

「もう一度行って、提灯でもふってくるさ」

「しかし、こう人が多くっちゃ、土下座をすると踏みつぶされるからな」

今夜は霧は湧かず、星たちが落葉松の梢ごしにふるえているのが見てとれた。帰途、二人の大学生は歌をうたいだした。殊に佐々木は調子外れのおそろしい胸間声をだした。「まだー沈まーずやーティエンは——」

行きがちがう人がふりかえるので、渡は恥ずかしかった。

家について、自分の部屋へはいろいろとしたとき、渡はあき子につかまった。

「渡さん、あんまりあの人たちとつきあわないでね。来年はあんたは高校生なのよ」

「偶然一緒になったんだよ」

「嘘おっしゃい。あんたは、あのならず者たちと遊びたいのでしょ。わかっているわ」

実際、渡は明日、佐々木たちと姫^{ひめ}鱒^{ます}釣りに行く約束をしてきたので、彼はひそかに心のうちで思った。愚かしい女ってものは、まったくカンだけは鋭いな。

約束どおり、朝食をすませたあと、渡は年長の同居人たちと釣り堀の池へむかった。佐々木は物凄く嫌味なボロシ

ヤツ、山口のほうは膝のぬけたズボンによれよれのYシャツである。二人ともまともな恰好をするのを恥辱とでも思っているようだ。

「鱒釣りという遊びは至極もの悲しいものだよ」

と、佐々木が言った。

「いくら糸をたらしけていてもかからんよ。餌の前をスイスイ泳いでいてでだぜ。そうかと思うと、なにかの拍子に釣れだしたら最後、なんとかして釣るまいと思っても駄目なんだ。歯をくいしばってもかかってくる」

「なにかと似てるな」と山口。

「といって、釣りあげていい気持ちになっていると、そいつを買わされるという寸法なのだ。釣れたが最後スカンピンさ」

「なんにしろそうしたもんだよ」

「持って帰って食ったところで、大してうまくもないや。釣りあげた瞬間だけだな。釣り道具をすてて俺は逃げたいよ」

「一体そんなに釣ったことがあるのかね」

「この世には、もののはずみということがある。そいつがもの悲しいのだよ」

「おいおい」と、山口が相棒の袖をひっぱった。「あそこにも、もの悲しいのがやってくるぞ」

「なるほど、こいつは素敵にもの悲しそうだな」

むこうの岐れ道から、一頭の馬がこちらに曲ってくる。渡はほとんど足をとめかけた。乗っているのは、まぎれもなく、昨日の朝、霧の中で行きあった女だったからである。襟の広いシャツブラウスに、この前のような七分のストラックスをはいている。彼女は左手に手綱をとり、右手にほそい木の枝を鞭代りにもち、ゆっくりと近づいてきた。渡は直視するのが苦痛で、そのくせその姿から目を離すことができなかった。

女はこちらには一瞥もくれない。まっすぐに前方を見つめ、なにげなく、しかも端然と、鞍の上にゆられながら通りすぎていった。鎧をふんでいる足には、借り物なのか、かなり大きな目のテニス靴をはいていた。

「鰯釣りはやめだ」

だしぬけに佐々木が言った。

「あっちにしよう」

「まず釣りがたいツラつきだな」と山口。

「あれは星野の貸馬だ。とにかくにも追いかけることだ」

佐々木は先に立って足早に歩きだした。

「坊や、君も乗れるな？」

「ついてくくらいなら」

「君もそろそろ年頃だから覚えておくがいい。今のような女は小娘あつかいにするんだ。本当の小娘に呼びかけるときは、奥さん、と言ってやる。要するに、齒のうくようなことを言えはいんだ」

貸馬の小屋にはちょうど三頭の馬が残っていた。

「おじさん、大急ぎ！」

佐々木は自分で鞍帶をしめあげ、意外に敏捷に鞍にとびのつて鎧の長さをあわせた。

「暑くなりそうだな。その表裏帽を借りていこうか」

そして、乱暴に馬の平頸を手綱でなぐって走りだした。

山口と渡がそれにつづいた。

今年をはじめて馬に乗るので、うまく反動がぬけない。やや広い道にでると、渡の背の低い年老いた白馬は、前の馬に追いつこうとして自分からギャロップにはいった。そのほうがよほど乗りよかった。

「あんまり早く走るなよ。どっちに行ったかわかるのか」

これも危なげな恰好で前を駆けている山口がどなる。

「星野温泉のむこうの道だ」先頭の佐々木がふりむいてどなりかえた。「俺のものの悲しき直感を信しろ」

なるほど温泉の入口までくると、テニスコートの横を並足でゆく女の姿が目にはいった。佐々木が馬をひきとめた。「もう少し行くと一本道だ。少しずつ距離をつめよう」

「おまえにまかしたよ」

と、めっきり元気がなくなった山口が鞍頭につかまるようにして言った。

「俺はクジラでも釣りにゆくような心地がするよ」

逡巡する馬をはげまして木橋をわたると、山腹をきりひらいた道がつづく。すでに強烈な日ざしが草いきを立ちのぼらせ、蛇がうるさくまつわってくる。渡は片手をのばして馬の平頸にとまった蛇を叩きおとした。馬の汗ばんだ肌の暖かさが掌にのこった。

だんだんと距離が狭まってきた。女が後ろからくる人馬に気づき、上体をふりむけてこちらを眺めるのが見えた。と思ううちに、軽い跑足で遠ざかりはじめた。そして道を折れるときギャロップにはいったようだった。佐々木が合図をし、こちらの三頭の馬も走りだした。

道は林道となり、はるかむこうに疾駆してゆく女が見え、すぐに曲って消えた。佐々木が馬をはげます声がきこえ、渡の背の低い馬は次第に遅れがちになる。少し前方を背を丸めて鞍にしがみついている恰好の山口がわめきたてた。

「糸が切れたほうがマシだ。俺はもう尻が痛いよ」

風にちぎられた佐々木の声が返ってきた。

「なんならその辺で落っこって、寝ていてもいいぞ」

熱くなった馬があえぐのがわかり、鞍革がきしり、風が

耳元をすぎる。疾駆と、あの女を追っているという意識が、訳もなく渡を夢中にさせた。

道の上につきだした枝の下を首をちぢめて駆けすぎると、今度はまったくすぐなやや広い道がつづき、ずっとむこうのほうで、女が馬をとどめ、駆けてくる若者のほうをふりむいているのが見えた。佐々木の馬がもつれるようにその横にとまった。相ついて、二頭の馬もそこにとまった。

渡の心は緊張にこわばったが、予期に反して、誰も口をきかない。まつわってくる蛇を避けて馬がたてがみをふり、肢をふみかえた。

女は完全に渡たちを無視している。路傍の草を食いちぎっていた馬の頭をひきあげ、ふたたび並足で歩ませはじめた。あとの馬は黙っていてもそれにつづく。大学生たちの背にさえぎられ、女の姿はちらちらとしか渡の目にはいらない。道の広まったところで女はまた馬をとめた。しかし佐々木は先へ行こうとはしない。

とうとう女が言った。

「どこまでついてくるつもり？」

曇ったような声である。

「これで用は足りましたよ」と、のんびりした声で佐々木が応じた。「あなたに、この帽子をとどけてあげようと思っ